

不死の英雄、火継ぎの
果ての未来を思う

ハナネット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数多の火継ぎの使命を帯びた不死人、その中のある一人の独白。

目次

不死の英雄、火継ぎの果ての未来を思う

1

一発ネタ 不死の英雄、人理の守護者と

なる（ダクソ3×FGO）

6

不死の英雄、火継ぎの果ての未来を思う

夢を見る・・・

火と闇の狭間に揺れ、火の熱に縋る儂い世界・・・

不死の使命を志す不死人が目指す最後の場所、最初の火の炉たる巨大な大樹の虚の中、今にも消えそうなか細い火が灯る篝火、その火を私は見つめていた。

なにもかもが自分には分不相応な大業、それこそ一国の英雄でも手に余るような血反吐と殺意に満ち満ちた旅だった。

私は自身の不死の呪いを消すために神の息づく土地、ロードランを巡りその方法を探し出そうとした。

火より生み出されしデーモン、おとぎ話でしか聞いたこともなかったドラゴン、古代より生き続ける神々など数多の人外たちとの戦い。

その果てに知った不死に課された使命。

そして・・・闇に堕ちた小ロンド遺跡にて知らされた不死の火継ぎの真実・・・

不死は我々人間が持つ、神々たちが見出した火の力、「王のソウル」の一つたるダークソウルの力の発現であり、火の消えた世界こそが闇の眷属たる人間の時代の到来を意味

すること・・・

最後の篝火にて私は・・・一つの選択をすることになる。

火継ぎを行えば再び世界に火の熱が巡り不安定となった生と死の境も、不死人の発生も取まり世界は以前と同じ神々と共に生きる安寧を取り戻す。その代わりに私は世界の火の薪となりその身を捧げることになる。火継ぎを否定すれば、火の熱は消え神々は力を失い世界は闇に満たされダークソウルの所有者たる人間による世界が生まれる。

正直に言えばふざけるなという状況だろう。不死の病を治したいと旅をしてきたのにその果てに知らされたのはそもそもそんな方法はなく、お前の使命は人柱だ、その身を捧げろと言ってきたのだ。使命を示した神々にしても人間の真実を隠して美辞麗句をもつて「不死の英雄」などと持て囃すのだからなお性質が悪い。

だが、迷って足掻き続けた旅の果てで、私は答えを見つけた。我々はその在り方に負の力を内在している。欲望のままにすべてを飲み込もうとする闇のソウルたる性質を・・・それでも自分たちはそれではないんだと無意識に心が叫んでいる。その火の温かさを縁にして今日の人間の今があるんだと私は思う。このまま世界に闇が訪れれば強きソウルを持たない弱い人々は不死の世界の中絶望の淵に立たされる。この地で心折れた亡者たちのように。

なにより私はそれが許せない。何度も死を繰り返し摩耗してしまった記憶の中で焼

きついたものがある。どこかの村で、丘の上から見た人々が笑顔を浮かべていた姿を。もう今の私にはそれがどのような意味を持っているのかはわからない。ただそれを思うと深い悲しみと穏やかな気持ちで溢れてくる。この最後の選択の瞬間よぎったこの記憶が私の選択を決めてくれたということは、消えてしまったかつての私のかけがえのない思い出だったのだろう。

理由は、それだけでいい。何もかもなくなってしまった私にとって、この記憶こそ私を私たらしめてきた熱だったのだから。

不死の呪いを解く方法はなかった。けど私が薪となることで続く願いがある。

どうか、あの笑顔が消えずに続きますように・・・

誰も見ていないひとりぼっちの火の炉の篝火で、どこともしれない不死人は篝火に火を灯し、薪の王となった。

広漠とした剣の荒野の中央、私は篝火の前で体を休めている。

どれだけ年月が経ったのか。火継ぎは、今も続いている。火は燃え尽き、次代の薪たる英雄がその身を燃やし世界を回している。もはや火継ぎは「儀式」へと在り方を変え、薪たる強大なソウルの持ち主が火の炬たる玉座へとくべられる。薪の王たちが、何度も何度も、数えきれない程無数に骸となつて積み重なり、火の熱を支えている。人々は未来に希望をみていない。いつ終わりが来るのかといつかの終末の到来に怯え、失望している。

目が覚めた。

かつての私の夢を見ていたようだ。

もはや「私」はかつての私ではない。くべられた・・・「俺」「僕」「わし」・・・不死人の意識が混在した内の、主人格の一つとして取り込まれた存在となっていた。私の中で摩耗したかつての思いが叫んでいる。

こんな未来を望んでいたのではない。火継ぎは次の未来に願いを託す希望に満ちたものではなかったのか。これではただ不治の病に侵された病人を無理やり延命させるような所業ではないか。笑顔は、私を支えてくれた熱はどこに行ったのだ。

既に選択は為されてしまった。自分の選択は正しいのだと、そう断言することが今の私にはできない。私にできることはただ待つことだけだ。ただ待つだけなのだ・・・。

篝火から離れた門の向こうより、強大なソウルが近づいてくるのを感じた。次の薪たる英雄が来たのだろう。私は目の前の篝火に刺さった大剣を引き抜いた。火継ぎの前に立ちはだかる障害として、薪の英雄へと最後の試練を与えるために灰まみれの体を持ち上げた。

次なる英雄よ、答えてほしい。火継ぎは本当に正しかったのか、私の選択は間違っていたのか。君の答えを、教えてくれ。

一発ネタ 不死の英雄、人理の守護者となる（ダクソ3×FGO）

灰の荒野、最初の火の炉での火継ぎを巡る戦いは終わった。灰の英雄は立ち、薪の王の化身はその身を散らし消えようとしている。

幾多の王たちの化身として、火継ぎが迎える最後の選択に辿り着くまで果てしなく長い年月を重ねてきた。その火継ぎも、王を倒した灰の英雄によつてまた新たな選択を示される。消え行く王にはもうその最後を見届けることはなく、その身をソウルとして英雄へと取り込まれるだろう。その刹那、王の中でふと駆け抜ける思いがあった。薪となり取り込まれた王より生じたものなのかは定かではない。だがその思いは純粋で狂おしいほど切なる願いであった。

「不死などいらない、人としての生と終わりが欲しい」

世界の火を守るため、その身を捧げてきた王たち。その中の火継ぎが不死の使命と呼ばれていた時代、不死の英雄達は各々の様々な理由を胸に秘め、薪となった。それらの一部の中で共通していたささやかな思いが消え行くこの瞬間に表出した。

聞き届くことなどないこの儚い思いを、しかし聞き受けるものがあつた。最初の火

の炉は今、消え行く火の力の影響によつて時間も空間も、果ては次元の垣根さえ歪みその境を曖昧にしていた。その次元の彼方より王の力を欲し利用しようと働く力の流れがあつた。それはこことは別の世界において、あらゆる滅亡の危機に際して働く人類の無意識が生み出す滅びへの反作用。合理によつてあらゆる流れに干渉する力。その世界の魔術師はそれを、「アラヤの抑止力（カウンターガードイアン）」と呼んだ。

灰の英雄は訝しんだ。自身に入り込んでくる王の化身のソウルの中で一部が吸い込まれるかのように赤黒く染まる空の彼方へと消えていった。あのソウルはどこにいったのだろうかと思ひに思つたが、まあいいかと気を取り直す。これでこの旅の最後なのだ。気にもすることもないだろう。そう思い最後の篝火へと向かうとし、なんとはなしに灰の英雄は振り返つた。見るのは先ほど王が消えた場所。最後に見た篝火の守り手だつた王、その最後の姿はまるで届かない星に手を伸ばそうとする子供のようであつたなと思ひ、再び篝火へと歩き出した。

「フオウ？フー、フオウ！」

顔を何かに舐められている感触でぼやけた意識がはつきりとしてきた。まるで死ん

だあと篝火の前に戻ってきた感覚を覚え恐怖から跳ね起き体を確認した。

「フオウ!？」

「きやつ!？」

何か白い毛むくじやらやら白衣を着た眼鏡の少女やらが見えたがそんなことはどうでもいい。体がミイラのように干からびた肌で覆われていないか体中を触り確認する。それでも安心できず、自分はようやく尻もちをつけてこちらへと驚きの表情を浮かべている少女に聞いてみた。

「変なことを聞くようだけど、僕を見て何かおかしいことはない?」

「はい?」

少女は何を言ってるんだこの人はと言わんばかりにこちらを見ながら、生真面目にも自分の体を一通り見てから答えた。

「いいえ、特におかしな様子はありませんよ。角も生えていないし尻尾もない健全なホモサピエンスだと思えます」

どうやら本当にどうもなっていないようだ。意識もはっきりだしようやく自分とは寝ぼけて取り乱していたことに気づいた。とりあえず先ほどから迷惑をかけてしまった少女へと謝る。

「驚かせてしまつてすまない。なぜ床に寝ていたかはわからないが挨拶もせず申し訳な

い」

「いえ、まるで死体のように寝ていた人がバツタのように跳ね上がるのでびっくりしましたが貴重な体験でした。人間は倒れ込んだ姿勢から一瞬で立ち上がれるんですね」

なにやら変な感動を覚えているが気にしていないようだ。座り込んだ少女に手を貸し立ち上がらせる。

「ところでここはいったいどこなんだ？」

「・・・また驚きました。先輩はよくわからない場所に目的もなく雪山登山を敢行する趣味があったのですか？」

・・・皮肉ではないようだ。少女の顔には純粋な驚きで満ちている。話している内に段々と思い出してきた。今から遡って一週間前、突然国連の職員だと名乗る男が家に現れ「世界の危機を防ぐため資質のある人間を集めている。君にも参加してほしい」と言われ悪質な宗教勧誘かと思ひ再三断ろうとしたのだが、「一人でも資質のあるものが必要だ。この世界の為に、君の力を貸してくれ」と言われ過去のトラウマからつい領いてしまった途端、家族には有名大学主催の海外研修カリキュラムへの招待と説明し（後日この職員が魔術使いであり暗示とやらで家族に納得させたと知った）その日のうちに海外へと渡航、人理継続保障機関「カルデア」の標高6000メートルの雪山にある施設まで登頂させられたのだ。そして、苦勞して施設ゲートから入ろうとした直後、生体

認証後の謎の模擬戦闘とやらを受けていたと思ったら廊下で寝ていた。（自分はマスターとやらで指示をだしていたが、あの戦士たちはなんだったのだろうか？）とにかく道すがら説明された話からすると、今世界の危機と思われる事象が発生し、その調査の為にマスターの資質を持つ魔術師が招集されており、足りない分を魔術とマスターの資質を持つ一般人から手段を選ばず集められた結果、自分が選ばれたということだ。

「・・・思い出した。よくわからない内に連れて来られたけど、要するにここは魔術師が作った施設で自分はマスターとやらになる為に集められたんだな」

「はい、やはり先輩はここに集められたマスターだったんですね。よかったです、もし関係のない不審者でしたらすぐさま警備員さんと呼ばなければいけないところでした。」

「フオーウ・・・」

少女と毛むくじやらが安堵する。そういえば・・・。

「まだ自己紹介さえしていなかったんだよな。度々失礼した」

「い、いいえ、私こそそんな初歩的なコミュニケーションを失念していました。すみません、先輩」

ところでこの子はどうして自分を先輩と呼ぶのだろう。まあそれは置いておいて。

「私はマッシュ・キリエライトと言います。こちらのリスっぽい生き物はフオーウさんです」「フオーウ、フオーウ！」

私たちは、これから始まる長い長い旅で世話になるパートナーへと、今の自分の名前を名乗った。

「僕の名前は焰間ほむらま 夜見よみ。よろしく、マシユ、フオウ」

|||||

主人公：焰間 夜見（ほむらま よみ）

転生した不死達の女（時々男）。

ダークソウル3では薪の王の化身の一部として灰の英雄と戦い消滅するが、火の力が弱まり時間と空間の概念が曖昧となった影響で異世界間の垣根を超え抑止力のキヤツチセールスへとサイン、複数の意思が混ざった存在として転生する。（あくまで王の化身内の普遍的な人生を送りたいと願った一部の不死人の意思が受諾されたものとし、アラヤサイドからの勧誘としています）

カルデアに呼ばれるまでは一般人と変わらない生活を送っており、新たな人生の価値を堪能しているものの、かつての世界から逃げ出してきたような境遇の自分に罪悪感も抱えている。そのため自身への不信から問題に積極的に関わろうとはしないもののもソウルの強い不死人の意思の傾向からかお人好しな性格であるため頼み込まれると最終的に引き受けてしまう。

人理焼却の事態への対策として人類の無意識が送り込んだ外なる力。普通の人生は与えるけど、何かトラブルがあつて力が復活しちゃったら仕方ないよね。契約前の注意事項は読み込まないと。（ありません）

冬木でのレイシフト時にシャドウサーヴァントの攻撃により死亡したことでダークリングが再び発現。不死の力を取り戻し蘇生するが同時に薪の王として取り込めなかったソウルも解放され、他の特異点へと散らばってしまう。そのため、ソウルレベルはリセットされ1からスタート、持たざる者となってしまう。（ちゃんとカルデア制服は来ている。）

旅の目的として人理修復と同時に散らばったソウルや収集してきた武器・防具・魔法・道具の回収も含まれる。

篝火作成の問題は自身そのものといえる篝火の大剣を召喚したエミヤ先輩の投影で劣化複製してもらつて解決している。

ちなみに性転換が可能（ソウルの業のちよつとした応用だ）